

環境資料第33087号

令和 2 年 度

水生生物調査結果報告書
(東京都内湾)



令和 4 年 3 月
東京都環境局

表紙の絵

左：ヨシゴイ（葛西人工渚（東なぎさ）、令和2年7月）

環境省レッドリストで準絶滅危惧種（NT）、東京都レッドリストで絶滅危惧ⅠA類（CR）に指定されている希少種。夏鳥として渡来し、ヨシやガマが生える河川敷や湖沼、水田などに生息する。過去の調査では平成26年度に葛西人工渚で1羽の記録があるのみで、今回が2度目の記録となる。

右：カナガシラ（St. 25、令和2年6月）

全長30cmほどに成長する。胸びれの軟条3対が独立して「脚」のように発達しており、海底を歩くことができる。またこの軟条の先端には味を感じる器官があり、砂泥の中の獲物を探って捕食する。本調査では、今年度初めて確認された。

東京都内湾の水生生物生息状況（令和2年度）



イラストはイメージです。必ずしも高次の生物と食物連鎖の関係があるとは限りません。

東京都内湾には、河口域や干潟域、河口と干潟をつなぐヨシ原、浅海部、内湾部等様々な環境があり、環境に応じて、さまざまな生き物が生息しています。

環境局では、昭和 61 年から環境把握の一環として水生生物調査を実施してきました。

令和 2 年度には、次の種類数が確認されました。

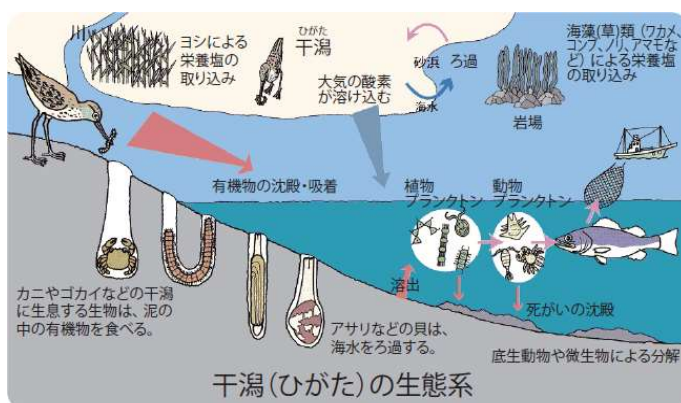
鳥類調査	：カワウ、カモ類等	51 種
成魚調査※	：ハタタテヌメリ等	12 種
稚魚調査	：マハゼ、ビリンゴ等	22 種
付着動物調査	：ムラサキイガイ等	77 種
底生生物調査	：アサリ等	63 種
プランクトン	：スケルトネマ等	75 種

※成魚調査は、小型底引網を使用した底生魚類を対象とした調査です。

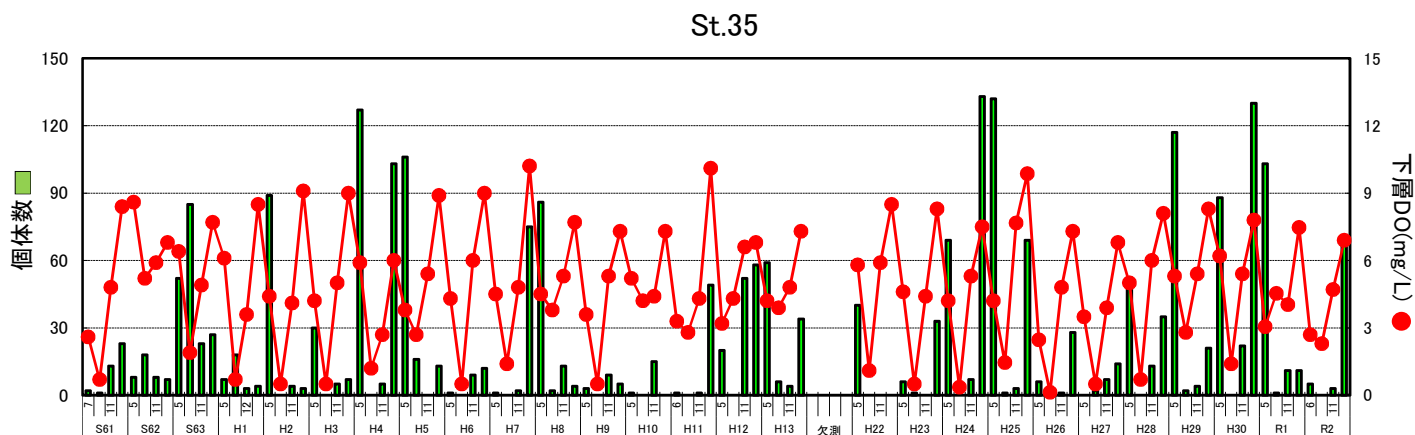
生きものは、海をきれいにする働きがあります。

わたしたちの出した汚れ(有機物)は、貝、カニ、ゴカイなどの生物のエサとなります。それらを鳥や魚等が捕え、移動や漁獲されることで系外に排出されます。

また、微生物は、海底の汚れ（有機物）を酸化して窒素を取り除きます（脱窒作用）。さらに干潟では、二枚貝が海水を取り込んだ際にプランクトンなどの懸濁物を取り除く



一方、東京都内湾の底層では、夏季に酸素濃度が低下する現象が発生しています。下図は、成魚調査の出現個体数と下層の溶存酸素量（DO）の関係を示したものです。9月の調査では下層（海底から1m上部）の溶存酸素量が2mg/L以下となることが多く、出現個体数は極端に減少しています。貧酸素水塊の存在が生物に与える影響は大きいのです。



Map of Sagami Bay showing sampling stations and biological species distribution. The map includes labels for rivers (Tama River, Sagami River, Sagami River, Sagami River), parks (Otae Beach Park), and various sampling stations (St. 6, St. 10, St. 22, St. 25, St. 31, St. 35). A legend in the bottom right corner defines symbols for adult fish, juvenile fish, birds, attached animals, and bottom-dwelling organisms.

生物種の凡例

- 成魚
- ★ 稚魚
- ▲ 鳥類
- ◎ 付着動物
- 底生生物

お台場海浜公園 ～水生生物にも人気のスポット～

実施調査：鳥類、稚魚



お台場はペリー来航時に砲台を置いた場所で、今でも二つの台場が残っています。一時期は貯木場として使用されていましたが、その後、海浜公園として整備されました。現在、近くには複合商業施設やテレビ局本社があり、夜には多くの屋形船が停泊し、東京の観光スポットとして賑わっています。人工砂浜も整備され、誰でも海のすぐ近くまで近づくことができます。

調査位置図



鳥類調査

カワウの成鳥と巣内のヒナ 7月



婚姻色のアオサギ 2月



ノスリ 2月



稚魚調査

コノシロ 8月



一般には「コハダ」という呼び名で知られる。東京湾を代表する魚の一つ。産卵期は春から初夏で、孵化した仔魚は内湾の干潟域等の浅所でもみられる。



マハゼ 6月

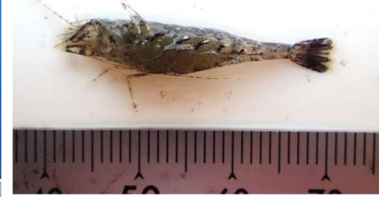


マハゼは、3地点のうちお台場海浜公園の6月で最も多く確認された。6月に採取された個体は2～7 cm程度と幅広いサイズが確認された。



12月には、体長1～3 cm程度のアユの稚魚18個体が確認された。

エビジャコ 6月



6月にエビジャコ属が多く確認された。エビジャコ属は魚類の稚魚などを捕食することによって知られている。



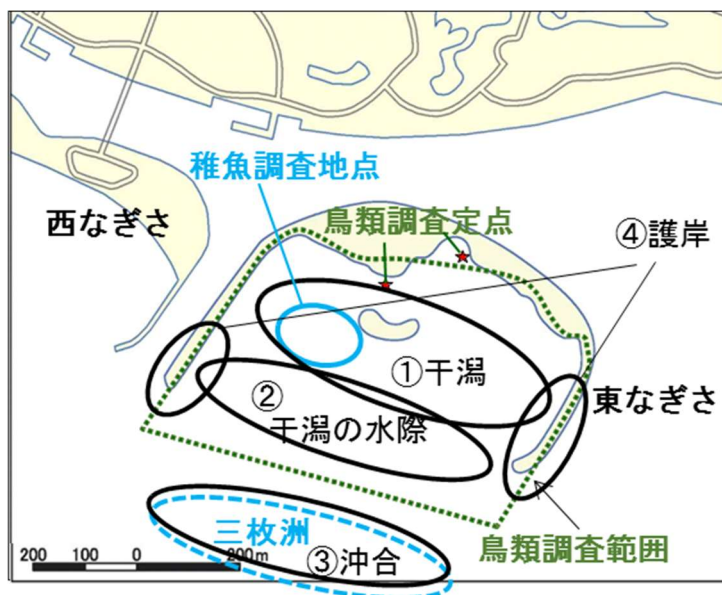
葛西人工渚（東なぎさ） ～水生生物の楽園～

実施調査：鳥類、稚魚



葛西人工渚は、葛西海浜公園に造成された人工の干潟です。2つの干潟（西なぎさ、東なぎさ）から成っています。西なぎさには橋が掛けられ、人の立入りが可能となっており、近年は海水浴体験イベントが実施され話題となっています。一方、東なぎさは環境保全ゾーンとなり、一般の立入りが禁止され、鳥をはじめとした水生生物の楽園となっています。

調査位置図



鳥類調査

①エリア シギ・チドリ類が採餌、休息。干潟でケリを、ヨシ原でヒクイナを初確認。



ヒクイナ 2月



ケリ 9月

②エリア カワウ、サギ類、カモメ類が休息。



シロチドリ

③エリア(調査範囲外)

スズガモ、カイツブリ類、カモメ類が海上で休息



スズガモとカイツブリ



④エリア カワウ、サギ類が休息

稚魚調査

エドハゼ 6月



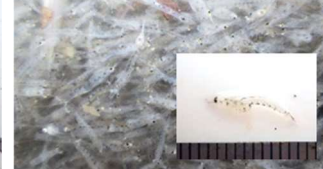
チクゼンハゼ 12月



メナダ 8月



ニホンイサザアミ



エドハゼやチクゼンハゼ等のハゼ科稚魚が多く採取された。また、平成16年以前は出現頻度が比較的高かったが、平成22年度以降確認されていなかったメナダが8月に確認された。

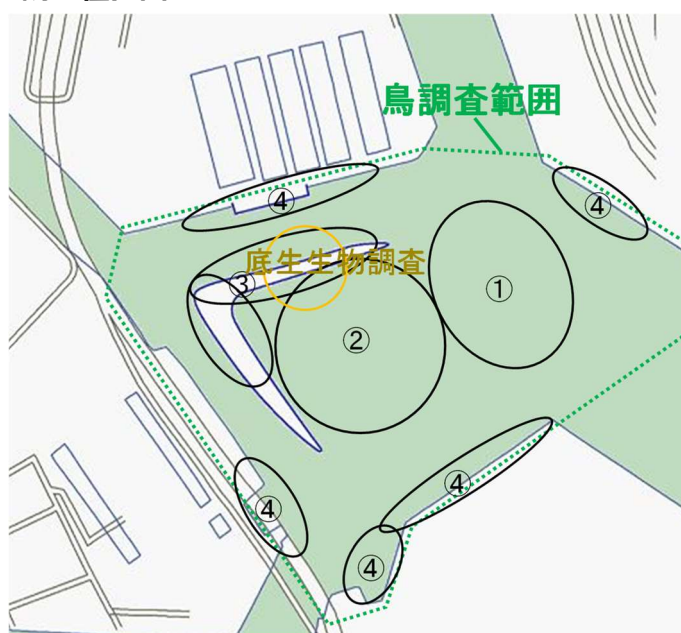
春から初夏にかけて大量発生し、魚類等の餌となる。

森ヶ崎の鼻 ～埋め立て地に囲まれた干潟～

実施調査：鳥類、底生生物

森ヶ崎の鼻とは、羽田空港の北西の運河域に位置する約 15ha の干潟のことです。干潮時には、くの字型の干潟が干出します。京浜島緑道公園等から眺めることが出来ますが、一般の立入りはできません。すぐ脇には東京モノレールが走っています。また、隣接する森ヶ崎水再生センターの屋上には、NPO 法人等により守られたコアシサシの人工営巣地があります。

調査位置図



鳥類調査

①エリア

コアシサシが空中から水面に飛び込んで採餌。



コアシサシ

②エリア サギ類、シギ・チドリ類が採餌、休息



ムナグロ

シロチドリ

イソシギ

キアシシギ



浅瀬で採餌するカワウと、周辺に集まったダイサギ

③エリアはカワウ、カモメ類、カモ類が、④エリアではオオバン、カモ類、カワウ等が休息していることが多い。

森ヶ崎水再生センターの「コアシサシ」



種の保存法：国際希少野生動植物種

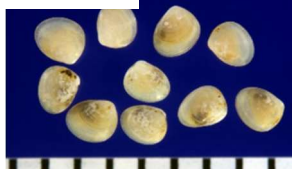
環境省レッドリスト 2020：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

東京都レッドリスト 2010 年版（本土部）：絶滅危惧ⅠB 類（EN）

オーストラリア、ニュージーランドで越冬し、4～8 月に日本周辺で繁殖。近年、自然の営巣地が減っている。森ヶ崎の鼻に隣接する森ヶ崎水再生センター屋上に人工営巣地がある（NPO、行政）。

底生生物調査

コハギガイ



ヤマトシジミ

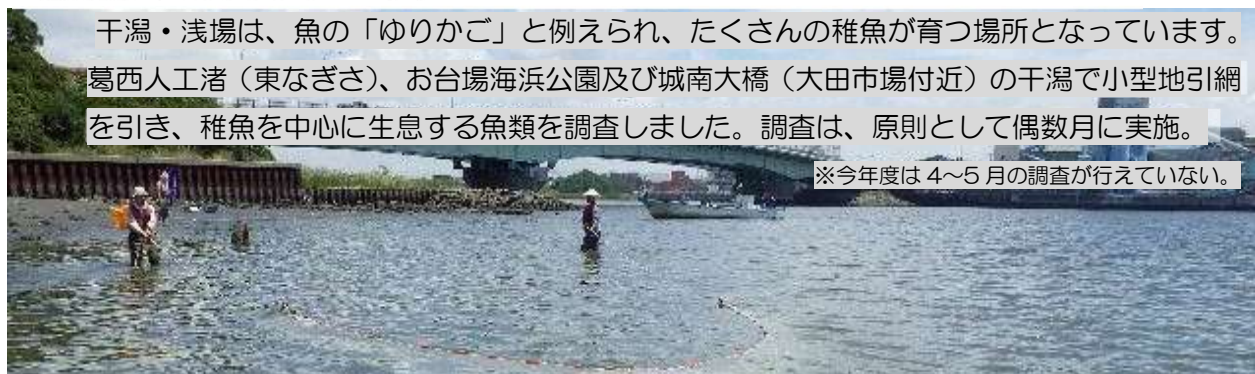


ミスヒキゴカイ

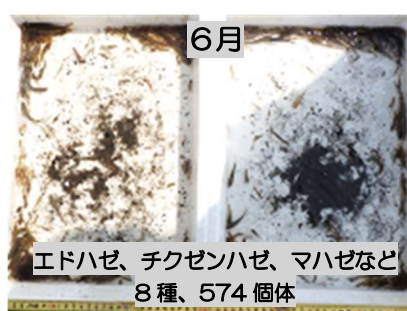


今年度は、春夏を通じてコハギガイ等の軟体類が最も多く出現した(個体数)。また、多毛類(写真右)も多く出現した。水深が浅く、河川に近いため夏季の貧酸素の影響は少ない。

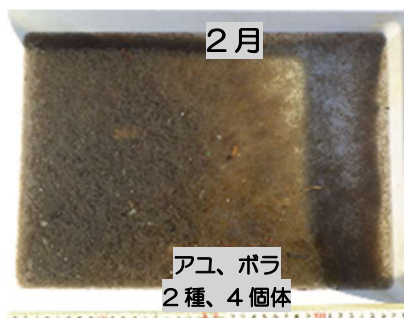
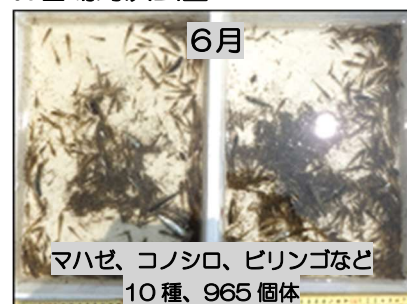
稚魚調査（本文 14 ページ）



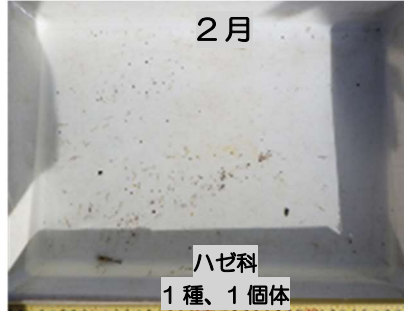
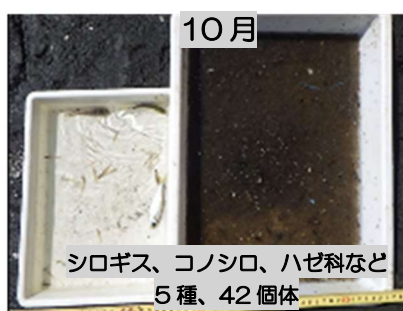
葛西人工渚（東なぎさ）



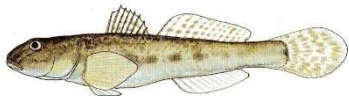
お台場海浜公園



城南大橋



稚魚調査（小型地引網）で採集された代表種

種 名	生 態 情 報	図・写真
マハゼ	東京では最も大きくなるハゼ。春先、稚魚が河口付近の干潟に現れ、成長するにつれて色々な場所へ散らばっていく。河口や内湾ではU字型の深い穴を掘って産卵する。	 東京都内湾の代表的な底生魚である。稚魚調査で確認されるマハゼは、10 cm 程の個体が主であるが、育つと全長は 30 cm 程度となる。秋から冬にかけて最も人気の釣りの対象種。

種 名	生 態 情 報	図・写真
ビリンゴ	泥底から砂泥底に住む。河口部に泥底域が発達しているところに多い。 岸辺近くの泥底に穴を掘るか、アナジャコやゴカイなど、他の動物が掘った穴を利用して巣を造り、巣穴の壁面に雌が産卵した後ふ化まで卵を守る。ふ化仔魚は一旦海に下り、しばらくして川へ遡上する。	寿命は2～3年であるが、1年で成熟して産卵後に死亡する個体も多い。全長は6cm程。  お台場海浜公園 12月
エドハゼ	自然環境が保たれている河川の河口域に生息する。砂泥底を好み、スナモグリ類やアナジャコ類が掘った巣穴を使って暮らしている。主に小型甲殻類を食べる。特に、葛西人工渚で多く出現する。	 葛西人工渚 6月
ボラ	出世魚で、小さいものから順に、ハク、オボコ、イナ、ボラ、トドと呼ばれる。卵巣を加工したものはカラスミと呼ばれ、珍重されている。 都内河川の下流部から内湾に広く分布している。泥底の有機物などを餌とする。	 お台場海浜公園 2月 海面で飛び跳ねる。お台場海浜公園で跳ねている魚を見かけた場合、その多くはボラである。成魚の全長は60cm程度。
スズキ	東京湾を代表する魚。河口の干潟などでは、春先、数cmの稚魚が多く現れる。東京湾を広く回遊し、都心近くの運河でも見られる。河口部から内湾に広く分布しており、ゴカイ類、甲殻類、小魚などをエサとする。	 小型のものは、体に黒っぽい斑点がある 成長すると全長は50～90cm程度になる。

魚類調査において確認された魚類以外の生物の代表種

干潟の地引網調査では、魚類の他に、アミ類や二枚貝などが採集されます。それらは稚魚などのエサとして重要な役割を持っています。

種 名	生 態 情 報	写真
アサリ	日本全国の淡水の影響のある内湾潮間帯の砂泥底に生息する。 殻長4cm、殻高3cm程になる。東京湾の干潟の代表種で、多くの人が潮干狩りを楽しんでいる。東京湾も多くの浮遊幼生が確認され、着底場さえあれば、生息可能であるとされている。	東京湾のアサリは、貝の柄が派手と言われる。 
ニホンイサザアミ	汽水域に生息するアミの仲間（エビの仲間でない）である。魚類等の餌となり、食物連鎖において植物プランクトン等生産者のエネルギーを上位の消費者に渡す重要な役割を果たしている。佃煮や飼料としても利用される。	

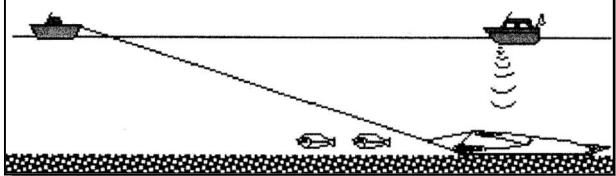
成魚調査（本文 47 ページ）

底引網を使って、海底に生息する魚類を調査しました。夏場、海底の酸素濃度が低くなる期間には、魚類の減少が顕著に表れます。（巻頭 1 ページ参照）。

東京都内湾で最も沖合のSt.35、中心にあるSt.25、千葉県側のSt.22、浦安沖の浅海部のSt.10の4地点で6月、9月、11月及び2月^(※)に調査を行いました。ここでは、St.25についてご紹介します。

(※) 例年5月、9月、11月及び2月に実施

成魚調査イメージ（作図：東京都環境科学研究所 安藤）



St.25（魚類以外も含む）

6月 29種、6,248個体 下層 DO 1.0mg/L

9月 5種、152個体 下層 DO <0.5mg/L



11月 13種、1,727個体 下層 DO 6.1mg/L

2月 32種、1,974個体 下層 DO 7.2mg/L



下層 DO（溶存酸素濃度）が低くなる夏場では、生物がほとんど確認できなくなります。酸素濃度が回復に向かう秋口から徐々に生物が戻り始めます。しかし、次の夏にはまた生物が生息できなくなる環境が発生するということが、現在の東京湾の大きな課題となっています。

成魚調査(ビームトロール)で採集された代表種（魚類以外も含む）

種 名	生 態 情 報	図
テンジクダイ	内湾から水深100mくらいまでの砂泥底にすむ。 夜行性で、7～8月頃産卵する。 雄が口の中に卵の塊を含んで守る。 海底の小動物をエサとする。	 目が大きい 全長は 9 cm程度
ハタタテヌメリ	内湾の砂泥底にすむ。雄と雌とで模様が異なる。雄は尾びれが長くて糸状に伸びる。粘液を出すのでヌルヌルする。ゴカイ類や二枚貝を餌とする。食用になる。	 St.35 11月
マコガレイ	水深100m以浅にすむ。イシガレイと異なり、成魚になると浅瀬では見られない。産卵期は冬で、東京湾では40cm以上のものも出現する。	 St.25 6月
シャコ	東京湾では 15～30mの深さにすむ。肉食性で甲殻類、多毛類等を捕らえて食べる。江戸前の寿司ネタとして重宝されるが、近年、漁獲が少ない。	 St.22 2月
タイラギ	尖ったほうを下にして海底に立っている。大きいものは殻長 25cmを超えるが、湾奥部では貧酸素の影響でこのサイズ（10cm 程度）で死滅する。潮通しのよい内湾の干潟から潮下帯、水深 30m の砂泥底に生息する。	 St.22 2月
ホンビノスガイ (外来種)	殻長 10cm を越える丸みを帯びた三角形の大型種。貧酸素状態等の環境悪化に耐性がある。外来種であるが、東京湾ではおなじみの貝となっている。殻の色は本来白っぽいですが、底泥中の硫化物の影響で黒っぽくなっている。	
シノブハネエラスピオ	干潮線以深の砂泥底に生息し、汚染の指標種として知られる。3 対の鰓があり、この鰓はすべて羽状の突起をもち、ハート型をした鰓葉が重なっている。体長 5 cm程度。	

鳥類調査（本文 68 ページ）

葛西人工渚、お台場海浜公園及び森ヶ崎の鼻で年6回（7月、8月、9月、10月、1月及び2月）^{（※）}に調査を行いました。

（※）例年5月、6月、8月、9月、1月及び2月に実施



※各地点の調査範囲内での鳥類の様子は3～5ページ参照。

調査の方法

望遠鏡や双眼鏡を用いて、船上や高台から鳥の種類ごとにカウントし、その行動（休息、採餌等）についても確認を行いました。

鳥類調査で確認された代表種及び重要種の一例

種 名	生 態 情 報	写 真
カワウ	留鳥として内陸の淡水や河川、湖沼等で最も一般的に見られる。たくみに潜水して魚類や甲殻類を捕食する。関東での繁殖はほぼ一年中であり、水辺近くの林で集団繁殖する。東京湾周辺では、第六台場や行徳鳥獣保護区等をコロニー（集団繁殖地）やねぐらとして利用している。東京湾の浅場は重要な採餌場所であり、多くの個体が採餌のために集まる。	お台場海浜公園で繁殖が確認された。  お台場海浜公園 1月
スズガモ	冬鳥として内湾や河川、湖沼等に渡来するが、沿岸の海や大きい内湾、河口部に多くみられる。東京都では、餌となる魚類やアサリ、シオフキガイ等の二枚貝が豊富な葛西人工渚周辺とお台場海浜公園の海上に見られる。冬に確認される個体数は非常に多く、数千～数万羽の群れが見られることもある。東京都レッドリスト2010では留意種となっている。	東京湾で見られるカモ類のうち、最も個体数が多い。夏季には繁殖しない個体が少数見られることもある。  お台場海浜公園 1月
ホシハジロ	冬鳥として湖沼、池、河川、河口、内湾などに飛来する。雄の頭部と首は赤褐色、胸は黒く、体は灰色。雌は頭部から首が褐色、体は灰褐色。群れていることが多い。水中に潜って、水生植物の茎や根、イネ科植物の種子などを食べる。甲殻類などの動物も食べる。	 お台場海浜公園 1月

種 名	生 態 情 報	写 真
ユリカモメ	ごく普通に見られる、やや小型のカモメ。冬季に海岸の漁港や河口、干潟、河川等に渡来。主に昆虫や無脊椎動物、死肉等を餌とする。群れで生活し、大群になることもある。 冬鳥であるが、夏季に少数が越夏することもある。春季と秋季の渡りの時期には、数千羽が見られることがある。	都民の鳥に指定されている。  お台場海浜公園 1月
アオサギ	日本に生息するサギ科では最大のサギ。水辺で魚を捕える。よく茂った樹林などに他のサギ類と共に集団繁殖地(コロニー)を形成する。鳴き声、フンの問題で近隣住民とトラブルになり、追い払われることが多い。第六台場、鳥の島でカワウ、コサギ、ダイサギとコロニーを形成しており、東京都内では数少ない繁殖地である。	 お台場海浜公園 8月
コアジサシ	夏鳥として湖沼、河川、砂浜等に渡来し、体長10cm位以下の小魚を餌とする。繁殖期は5～7月で、海岸や川の中州、埋立地の砂地や砂礫地で集団繁殖する。東京都では、森ヶ崎水再生センターの屋上に人工営巣地が造成されている。種の保存法の国際希少野生動物等に登録されている重要種。	 森ヶ崎の鼻 7月
カンムリカイツブリ	主に冬鳥として海岸や海岸付近の湖沼、大きな河川等に渡来し、魚類や甲殻類、昆虫類等を餌とする。 東京都では冬季に葛西人工渚周辺の海上に集中して見られる。かつては生息数が少なかったが、1993年度以降から急激に増加した。潜水して魚類や甲殻類、昆虫等を捕食する。 東京都レッドリストでは留意種。	冬羽では顔から胸が白く、首が長く体が大きいため、海上に浮いていると白く目立つ。  森ヶ崎の鼻 1月
ヒクイナ	留鳥として全国の河川や湖沼、水田などの湿地に生息する。顔から腹まで赤褐色で、足は赤い。ヨシ原などに潜んでいることが多く、開けた場所には出てこないため、姿を見る機会は多くない。水生昆虫や甲殻類、魚類などを捕食する。環境省レッドリストでは準絶滅危惧(NT)となっている。	今年度本調査で初確認された。  葛西人工渚 2月

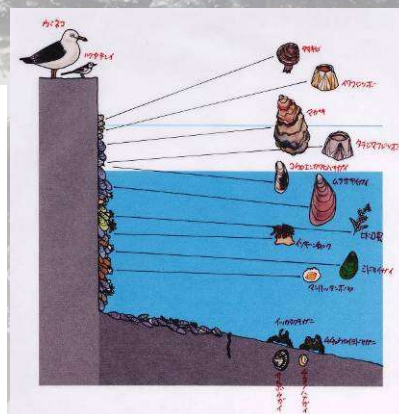
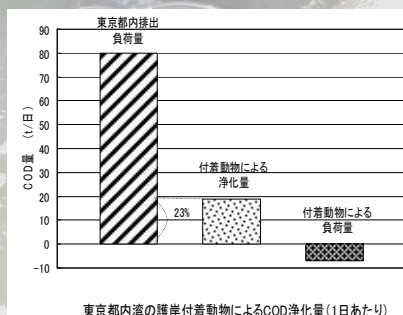
付着動物調査（本文120ページ）

付着動物とは護岸についた生き物のことを指し、その生息範囲は長期間にわたる環境の影響が反映されます。調査は、岸壁から海底まで潜水して垂直に分布状況を調べます。中央防波堤外側（その2）東側、13号地船着場で6月に年1回^(※1)、付着動物の調査を実施しました。付着動物は、ムラサキガイ等の外来種が多いことが特徴的で、バラスト水との関係で水環境・生態系の問題となっています。

付着動物の死骸は海底に堆積するため、貧酸素水塊が形成される一因とも考えられています。一方、付着生物は水質の浄化にも寄与しており、東京港内護岸総延長でのCOD浄化量が、東京湾に排出される汚濁負荷量の23%に相当するとする試算結果^(※2)もあります。

(※1) 例年5月に実施

(※2) 東京都環境科学研究所
木村ら 1998



調査地点の状況

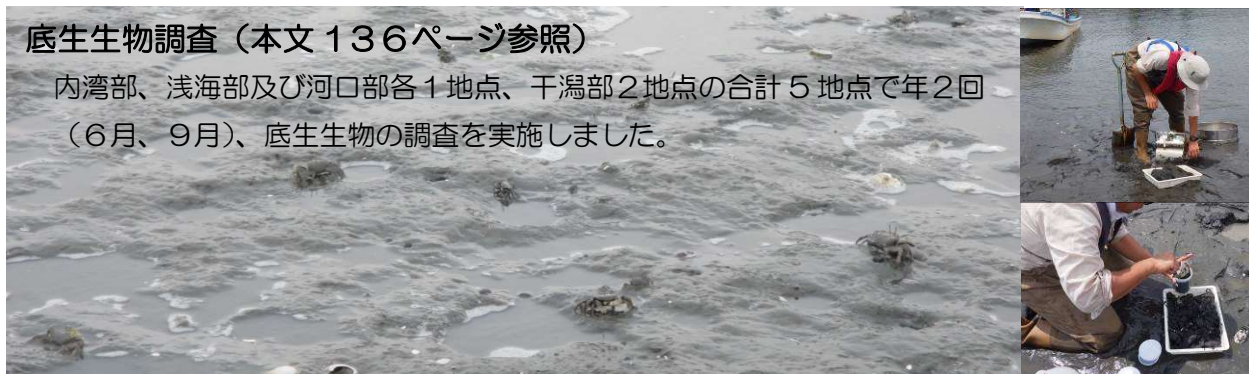
	中央防波堤外側(その2)東側	13号地船着場
概況写真		
備考	中央防波堤外側埋立地の外側岸壁を調査地点として設定。	お台場海浜公園から中央防波堤埋立地へ通じる第二航路海底トンネル排気塔にある船着場を調査地点として設定。

付着動物調査で確認された代表種等

種名	生態情報	今年度の確認状況
イワフジツボ	【代表種】潮間帯の岩の上部に群生する小型のフジツボ。殻口は広く、周殻は単独のときには円錐形であるが、密集すると円筒形を呈する。長時間の干出によく耐える。北海道南西部以南に分布し、内湾でもかなり奥まで分布する。周殻の直径8mm内外。	両地点とも潮間帯の上部に優占した。
カタユレイボヤ	【代表種・外来種】体は半透明で、体長10cm程になるホヤ類である。東京湾では普通にみられ、内湾域の岩礁や護岸等の基質に群生していることが多い。プランクトンを濾過して食べる。	潮間帯から潮下帯で優占した。

底生生物調査（本文 136 ページ参照）

内湾部、浅海部及び河口部各 1 地点、干潟部 2 地点の合計 5 地点で年 2 回（6 月、9 月）、底生生物の調査を実施しました。



内湾部（St.6）及び浅海部（三枚洲）

St.6		三枚洲	
シノハネエラスピオ ムラサキガイ(死殻)		シズクガイ	チヨノハナガイ
コウロエンカワヒバリガイ(死殻)		ヒメシラトリ	チロリ属
6月 10 種・181 個体 下層 DO 0.7mg/L	9月 0 種・0 個体 下層 DO 1.0mg/L	6月 26 種・665 個体 下層 DO 3.3mg/L	9月 4 種・305 個体 下層 DO 0.7mg/L

河口部（St.31）及び干潟部（多摩川河口干潟）

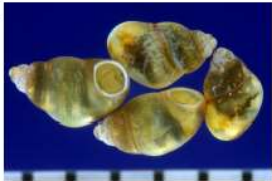
St.31		多摩川河口干潟	
シオフキガイ	アサリ(稚貝)	シオフキガイ	アサリ(稚貝)
ソトオリガイ	ムロミスナウミナナフシ	ホンビノスガイ	マテガイ
6月 16 種・169 個体 表層 DO 6.6mg/L	9月 16 種・228 個体 表層 DO 4.6mg/L	6月 7 種・20 個体 表層 DO 6.0mg/L	9月 10 種・51 個体 表層 DO 4.6mg/L

下層 DO と表層 DO

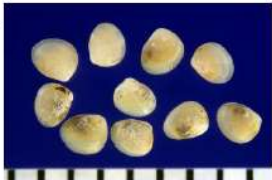
調査対象の底生生物が生息している付近の水深の DO を併せて載せています。干潟・浅場では、夏季でも生物が生息できる程の溶存酸素量があることがわかります。

下層 DO（海底から 1m 上）：内湾部、浅海部
表層 DO：干潟部、河口部

主要な底生生物出現種

軟体動物門 腹足綱 エドガワミズゴマツボ <i>Stenothyra edogawensis</i>	
説明 殻長3cm程度になる。淡水の影響の強い内湾奥の泥干潟上の泥上に生息する。東北から九州まで分布する。 【出現状況】 夏季に多摩川河口干潟で出現した。 環境省RDB 準絶滅危惧 (NT) 千葉県RDB 一般保護動物 (D)	

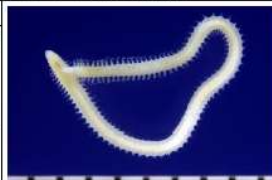
軟体動物門 腹足綱 シオフキガイ <i>Macra veneriformis</i>	
説明 殻長5cm程度になる。潮間帯から水深20mほどまでの砂底や砂泥底に生息する。殻の色は白色から紫褐色まで変異が大きい。 【出現状況】 春季にSt. 31、夏季にSt. 31、森ヶ崎の鼻でそれぞれ出現した。	

軟体動物門 二枚貝綱 コハギガイ <i>Lazaea reikoe</i>	
説明 内湾奥砂泥干潟中・低潮帯の底泥に浅く埋もれて生息する。環境錯乱により東京湾奥部に爆発的に増殖したが、近年までは発見例がない。 【出現状況】 春季に夏季に森ヶ崎の鼻で出現した。 環境省RDB 情報不足 (DD)	

軟体動物門 二枚貝綱 ヤマトシジミ <i>Corbicula japonica</i>	
説明 殻長4cm程度になる。河口干潟等淡水の影響の強い、砂底から泥底に生息する。 【出現状況】 春季にSt. 31、森ヶ崎の鼻、多摩川河口干潟、夏季に森ヶ崎の鼻、多摩川河口干潟でそれぞれ出現した。 東京都RDB 留意種 千葉県RDB 重要保護生物 (B) 環境省RDB 準絶滅危惧 (NT)	

軟体動物門 二枚貝綱 アサリ <i>Ruditapes philippinarum</i>	
説明 殻長4cm程度になる。潮干狩りなどで盛んに獲られている代表的な二枚貝。東京湾のものは形が細くて、模様のコントラストが強いものが多い。 【出現状況】 春季にSt. 31、森ヶ崎の鼻で、夏季にSt. 31、多摩川河口干潟でそれぞれ出現した。	

軟体動物門 二枚貝綱 ソトオリガイ <i>Laternula marilina</i>	
説明 殻は閉じていても完全に閉まらず、前後に隙間ができる。河口の泥干潟に深く潜り、水管で干潟の表面から水と一緒に食物を取り込んでいる。東京湾では、湾奥部には比較的多くいるが、それ以外の場所ではあまりみられず、全国的にみても数は少ない。 【出現状況】 春季にSt. 31で出現した。 千葉県RDB 要保護生物 (C)	

環形動物門 多毛綱 カタマガリギボシイソメ <i>Scoletoma longifolia</i>	
説明 潮間帯から水深800mの泥質に生息する。有機汚濁指標種となっている。 【出現状況】 春季にSt. 6、三枚洲、夏季に三枚洲でそれぞれ出現した。	

節足動物門 甲殻綱 ミツオビクマ <i>Diastylis trilineata</i>	
説明 小型の甲殻類で体長は8mm程度。日中は砂泥中に潜り、夜海面近くに浮上して餌をとる。 【出現状況】 春季にSt. 31で出現した。	

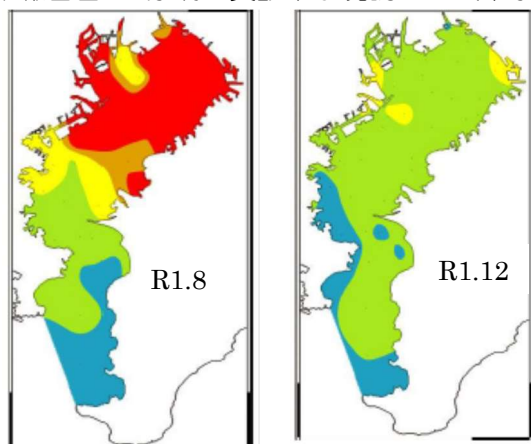
環形動物門 多毛綱 シノブハネエラスピオ <i>Paraprionospio paterulus</i>	
説明 ハネエラの名の通り頭部に羽状の鰓を持つ。貧酸素環境に耐性があり、有機汚濁指標種となっている。 【出現状況】 春季にSt. 6、三枚洲、夏季に三枚洲、St. 31でそれぞれ出現した。	

節足動物門 甲殻綱 ムロミスナウミナナフシ <i>Cyathura muromiensis</i>	
説明 体長2cm程度。細長い円筒状の体をしており、白地に褐色の斑紋がある。干潟の表層部に巣穴を掘って生活する。 【出現状況】 春季と夏季にSt. 31、多摩川河口干潟でそれぞれ出現した。	

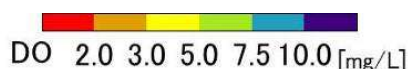
節足動物門 甲殻綱 ヤマトオサガニ <i>Macrophthalmus japonicus</i>	
説明 甲幅4cm程度。柔らかい水分の多い泥干潟に斜めの穴を掘って巣穴を作る。巣穴の入り口には放射状の浅い溝ができる。 【出現状況】 夏季に多摩川河口干潟で出現した。 東京都RDB 留意種	

生き物の脅威となる「貧酸素水塊」

東京湾、とりわけ東京都内湾では、毎年、春から夏において、下層に溶存酸素量（DO）の低い「貧酸素水塊」が、広範囲・長期に形成されます。この水塊は、水生生物の生育・生息を阻害する原因の一つとなっており、東京湾の水環境の大きな課題となっています。貧酸素水塊形成の要因と考えられるのは、夏季を中心に発生する赤潮です。赤潮については、「令和2年度 東京湾調査結果報告書 ～赤潮・貧酸素水塊調査～（東京都環境局）」にて詳述しています。



一般的に、DO が 4 mg/L 程度以下から生物の生息に影響が始め、2 mg/L 以下では、生物の生息が極めて難しくなると言われています。



平成31年度における東京湾の下層 DO（溶存酸素量）の平面分布

左：貧酸素水塊が広がる8月、中央：回復過程にある12月

（東京湾岸自治体環境保全会議ホームページより）

貧酸素水塊の影響 ～成魚調査より～

令和2年9月の調査時には、下層の溶存酸素量が低めであり、生物種類数が激減しました。一方、貧酸素水塊が形成される前の6月、解消後の11月、2月の調査では、多くの生物が確認されました。

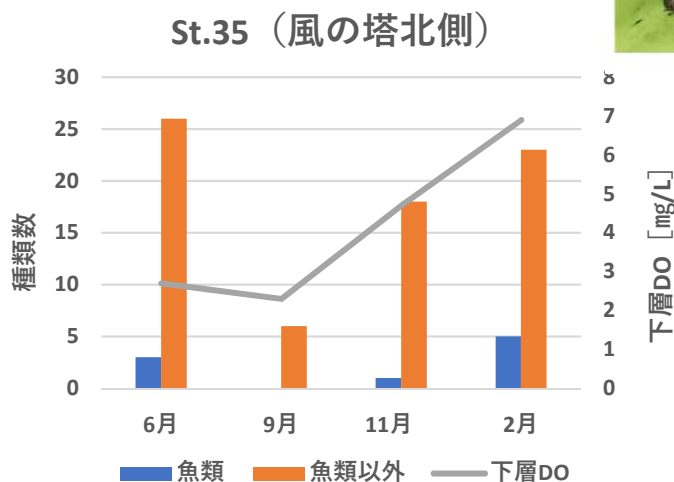


図 St.35 の採取生物種類数と下層 DO

6月 29種 1,482個体



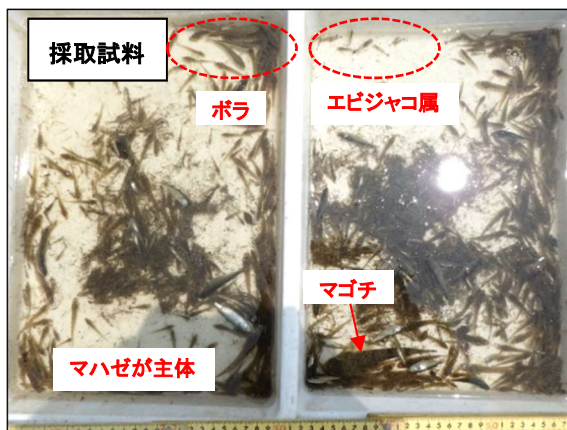
9月 6種 162個体



速報記事紹介（一部抜粋）

稚魚調査 令和2年6月

お台場海浜公園



採取した生物のうちマハゼが最も多く、ボラやコノシロも採取された。また魚類以外では、魚類の餌となるニホンイサザアミやエビジャコ属が採取された。



主な出現種



東京湾を代表する魚の一つ。内湾や河口域の砂泥底に生息する。稚魚は、初夏から秋にかけゴカイや甲殻類を食べて成長し、徐々に深い場所へと移動する。



内湾や河口域の水深 30m 以浅の砂泥底に生息する。産卵期は 4～7 月。成長するにつれて徐々に深場へと移動する。肉食性で、小魚などを食べる。



河口付近の干潟域で稚仔魚が 3～5 月に大量発生する。稚魚が成長するにつれて河川上流側に移動する。早春にアナジャコ等の甲殻類の巣に産卵する。



クロダイ

夏秋の幼魚期は内湾や沿岸域に定着する。秋冬は内湾周辺の深場で越冬をする。産卵期になると浅い砂地のある入江や湾内外の磯場にて集団で産卵する。



エビジャコ属

内湾の砂泥底に生息し、普段はごく浅く潜って隠れている。体色は周囲の環境に合わせて変化する。小さな体のわりに猛猛で、魚類の稚魚等を捕食することが知られている。



アラムシロガイ

内湾の干潟に生息する巻貝である。死んだ生物の肉を食べる(腐肉食性)ことから『海の掃除屋』などと呼ばれている。